2025 年 2 月 12 日（水）

『 琵琶湖疏水（びわこそすい） 』

岡田一二三 会員

水量豊かな琵琶湖から京都へと水を運ぶ「琵琶湖疏水」は、滋賀県大津市観音寺から京都府京都市伏見区堀詰町までの全長約 20km の「第 1 水」

明治期の竣工以来、今なお“現役”で活躍している人工の運河です。

平安京以来、千年以上にわたって日本の都であった京都は、明治維新における事実上の東京遷都によって人口の約３分の１が減少し、「いずれ狐や狸の棲家になる」といわれました。しかし、人々はただ嘆いたのではなく、京都と大津を結ぶ「希望の水路」琵琶湖疏水の建設に、都市再生の望みを託したのです。

1867 年（慶応 3 年）徳川慶喜、朝廷に大政を奉還、1868 年、明治天皇による大政復古の大号令、明治新政府の発足、その後、日本を二つに分ける戊辰戦争勃発後。

明治 14（1881）年、第三代京都府知事に就任した北垣国道は、琵琶湖から引いた疏水の水力で新しい工場を興し、舟で物資の行き来を盛んにしようと計画しました。

当時の京都府の年間予算の 2 倍という、莫大な工事費を要する前代未聞の大事業には、当時、最新の技術や知識を学んでいた若い才能が抜擢されました。工部大学校（現在の東京大学工学部の前身の一つ）を卒業したばかりの田邉朔郎（当時 21 歳）を工事の担当者として迎え、欧米の測量術を学んで実績を積んでいた島田道生（当時 33 歳）が精密な測量図を作成し、明治 18（1885）年に工事が開始されました。

しかし、工事は過酷を極めました。硬い岩盤をダイナマイトで破砕し、つるはしで土を掘り、手提げのカゴで運ぶなど、すべてが人力でした。また、トンネル内部はカンテラのほのかな明かりで作業が進められ、蒸気式ポンプで水を排出していました。

大半の資材を自給自足で賄い、夜には技術者を養成し、昼にはそれを実践するという、努力の積み重ねとなりました。

工事は延べ 400 万人の作業員を動員し、日本で初めて竪坑（たてこう＝シャフト）を利用したトンネル掘削工法を採用するなど、技術的な工夫を行いながら進められます。トンネルを掘り進む中で湧き出る大量の地下水など、多くの問題に悩まされつつも、約 5 年に及ぶ難工事の末、明治 23（1890）年に第 1 疏水が完成しました。この頃の日本では、大規模な土木工事は外国人技師の設計監督に委ねるのが普通でしたが、琵琶湖疏水の建設は、設計から施工まですべての工程を日本人の手で担った、最初の事例となりました。